

のを見て嘆くまでもなく、猶ほ保存の手を下す時のない寺もあり、又、今後にも残るものと思ふので、この附近に、プラカーン Prah-Khan やタプローム Ta-Prohm があつて、今日も、廿五年前にバイヨンを訪うたと全く同じ事情にあり、樹々の繁つた間に其の半ば以上を隠してゐて、僅かに日光が葉の間に洩れる位の所にある。而して、前に述べた戦かひの様子は残らず目撃し得ると思ふので、中には、來るべき終末に全く近づいてゐるものもある。

年を逐うて、之等の事業が倦む事なく続けられると共に、之等の遺跡について知る所は、極めて正確となり、一般的となり、案内者自身も、殆んど無稽の説明をしない程になつてゐる。其案内者も他の人も始めに述べるのは、アンコール・トムの建設は、西暦九世紀以上に溯る事なく、アンコール・ワトは十二世紀に建てられた事をいふ。一口にいへば、日本の藤原時代によく當る時代の事である。又、遺つてゐる建物の性質に關しても、何等確實を缺く事もなく、夙に其の寺院である事は認められてゐたので、實際、こゝで思ひ出すが、ド・ベイリエ De Beylie 將軍は、軍人であつて而も考古學者で、其の如何に